化上の一大轉換期が平安朝の終りから鎌倉時代初期へかけてのことであります。かういふときに、この「平家物語」はかかれたのです。

かういふ時代には、今までの舊い時代をなつかしんで悲しむひと、新しい時代を喜び迎へるひとなど、いろいろな複雜な有様がみられたと思ひます。そのことはこの「平家物語」を讀むと實によくはつきりと描かれてをります。

殊に前にも言ひましたやうに、この作者は、交替期の舊い側にも新しい側にも、興味を持つてゐた人間でありますから、一層、その邊のことはありありと描れてゐるのであります。尙、作者が舊い文化を身につけてゐる人であるのに、新しい時代へ非常な注目をしてゐたといふことは、面白いことでありますし、また偉いことだと思ふのであります。

5　平家物語の精神と國民性

日本の精神といはれるものは、皆さんも承知してをられるやうに、實に肇國のときから既に立派に形造られてゐるのであります。そのことは神話などにも現はれてゐることを、お話した筈です。けれども、現在の日本國民の精神に直接、つながりを持つてゐるものは、だいたいは、鎌倉時代以後に形造られたものが多いのであります。

特にこの「平家物語」は「軍記物語」といはれるもののひとつとされてゐて、平安朝の「源氏物語」のやうなお公卿さんの時代の優美な、宮廷生活を舞臺としたものとは、だいぶ樣子が變つてきてゐます。そこには、卽ち武士たちの合戰を中心にした描寫が多くみられます。けれども武士といつても、やはり、われわれと血を同じくした日本人であります。勇武な一面もあると共に、實にみやびやかな優しい反面を持つて居ります。

これはひとつには、お公卿さんの時代と武士の時代とが、渦卷いてゐるから、さういふ二つの面がみられるといふことも勿論、言へますが、同時に、それは國民性の二つの面だとも言へるわけであります。

そしてまた、前にも言ひましたやうに、この作者が世の中を見る眼がすぐれてゐたために、あらゆるその時代の有樣をしつかり捉へてかくことができたので、かういふいろいろなものがはつきりと、描かれたのであります。誰でも「平家物語」を讀む者は、その勇ましい武士たちの精神や行ひに心を奮ひ立たせられるでありませう。始めに揭げました那須與一の悲壯な青年武士らしい決心を深く感じては、涙ぐましい思ひをさせられるのです。

また「小督の局」の話を讀んで、そこに日本女性らしいしとやかさを深く識り、月の明りの中に馬をすすめて小督のありかを探す仲國の姿に、ゆかしい日本の昔の男子のこころを思ふのです。

それからまた、日本の思想には、印度から支那を經て渡來した佛教思想や、支那の儒教（孔子孟子の教へ）などが深く入り込んでゐて、それが實に外國的でなく、日本化されてゐるのです。そのことは、この「平家物語」の中に巧みに取り入れられてゐます。元來は前に言ひましたやうに、佛教思想が根本になつてゐるやうですが、しばしば儒教精神もみられます。あの皆さんが知つてをられて馴染み深い「重盛」が父、清盛をいさめたり、またいろいろな行ひをするところに、どんなにそれが強く現はれてゐることでせうか。

かういふ風に、鎌倉時代の初め頃から興つて、その考へ方、感じ方を、うち建てた武士の精神の中には、古來の日本の精神と共に、佛教や儒教やいろいろな外國の思想を巧みに取り入れ、それをみごとな日本精神としてまとめあげたのです。日本精神のうちでも、われわれが今も尙、誇りにしてゐるのは「武士的精神」とか「武士道」と言はれるものであります。かういふものもやはり、鎌倉時代以後の武士が形造つたもので、この精神が永く續いてゐて、今日のわれわれの心に生きてをり、それがあらゆる場合に戰爭だらうと、日常の生活だらうと、立派に發揮されるのであります。

「平家物語」には、さういふわれわれの心に生きてゐる誇るべき精神が、次第に形造られてきてゐることが、ありありとみられます。それでありますから、この物語が永いこと、國民の間に讀まれてきた間に、知らず知らず、さういふ精神をどんなに深く人々の心に植ゑつけたことでせうか。

そしてかういふ事柄が、ただごたごたと書きならべられてあるといふのなら、それは通俗な歷史の本ぐらゐのことでしかないわけですが、「平家物語」が、それを巧みに按配して、實に生き生きと讀む者の胸にひびくやうにかいてあるところに、文學としての立派さを示すのです。また、文學として立派であるからして、人々の心に強く訴へる力を持つてゐるのであります。

それから最後に、この物語が永くわれわれ國民の間に傳へられてきたことに就いて、注意しておかねばならないことは、これが前にも述べましたやうに、ただ讀まれたものではないことであります。もしこれが眼で讀むだけの本であつたら、それは昔の文字の讀める人々の間にだけ大體、傳はつたのでありませう。「源氏物語」の如きは、さうであります。ところが、この「平家物語」は、文字は讀めなくても、耳さへあれば知ることができたといふ特別の點があつたものです。即ち、もつともつと廣い大衆の心の中に這入つてゆかれる性質を持つてゐたのです。

それは即ち、「盲法師」とか「琵琶法師」とか言はれる人々の音樂的な技術に助けられて、非常に

廣い範圍に傳はつたのであります。そしてこの「盲法師」たちが、かなり身分の低い人たちであつたといふことは、この文學を上流の特殊なものでなく、廣い大衆のものとするに非常に役立つたことでありませう。

勿論、上流の人々の前に呼ばれて、彼らは琵琶を奏でながら語つたこともありますが、多くの人人が集まる神社やお寺の境内などで、これを語つたのでして、それを聽いた人たちは、あの義經の「鵯越」の話や「義仲の最後」の悲壯な話などを、どんなに感動して耳をかたむけたことでありませう。

さういふ風にして眼に見えない日本の精神は人の心から心へとひびき渡つて行つたのであります。あの德川時代に「日本外史」といふ歴史をかいた名高い「頼山陽」などといふ學者も、勉强して疲れると、自分でこの琵琶を奏でて、語り乍ら自分の心を慰めたといふことであります。

ですから、さう考へてくると、これは單に眼で讀む文學であるばかりでなく、耳で聽く音樂でもあるわけであります。ここに、この物語が普通の文學以上に、國民の間に廣まり傳へられた大きな原因があるといふことを知らねばなりません。それですから、これは眼に見えない日本人の心に精神として植ゑつけられたばかりでなく、作品としても、後の文學や、その他の藝術にいろいろと受け繼がれてゆきました。

たとへば今日でも人々が唸つてゐる「謠」などの中には、どれほど澤山、この「平家物語」の材料を取つたものが多いか知れません。また「淨瑠璃」とか「歌舞伎」の中にも澤山みられます。それですから「平家物語」を、たとへ直接讀まない人でも、日本の音樂や芝居を聽いたり觀たりしてゐる人は、間接に「平家物語」の話を知ることになるくらゐです。かういふ具合ひで、今日までわれわれの心の血や肉となつて、この作品は傳はつてきましたが、未だこれからも永く傳はつてゆくことでせう。まことにかういふほんとに日本の古典らしい古典は、われわれも誇りとして今後永く傳へてゆかなければならないと思ひます。

われわれは今や烈しい時代の轉換期の只中にあり、やがて輝やかしい歴史の夜明けを待つてゐるのです。さうしたとき、同じやうに日本の過去の轉換期に作られたこの物語は、特に意味深いものであることを十分に考へてみる必要があらうと思ひます。

谷崎源氏寸感

野上豊一郎氏の「飜譯論」を開いてみると次のやうな言葉がある。

「自覺あるすぐれた飜譯者についてみると、その態度は自然二つに分れ、一つは、何よりも原作者を重視し、飽くまで原作に忠實であらうとするものと、今一つは、反對に、讀者を重視して、讀者の理解と趣味を目標にしようとするものと、此の區別があることはすでに述べた。謂はゆる受容的態度と適合的態度である。前者の傾向を持つ飜譯者は時としてはあまりに忠實を意圖して讀者を置き去りにすることがあり、後者の傾向を持つ飜譯者はしばしば讀者を顧慮しすぎて原作者を犧牲にすることがある。われわれの文壇の飜譯者のうち、逍遙・二葉亭・鷗外等の先輩は概して後者の傾向を持ち、それ以後の年少飜譯者にはむしろ前者の傾向を持つ者が多い。一は啓蒙的であり、他は學究的である。しかし、想像し得るかぎりの最上の飜譯者は、此の二つの態度を併せ持ち、讀者を十分に親切に顧慮すると共に、原作者に對しては飽くまで忠實であらねばならぬ」

これは外國作品の飜譯の問題であるが、同一の國土、同一の民族のものでも同じことがいへるであらう。しかもこの「此の二つの態度を併せ持つ」といふことが實際問題としていかに苦難なことであるか。

「谷崎源氏」には、まだほんの片鱗に私は接したにすぎぬ。併しその片鱗を捉へて私は、いま「谷崎源氏」について寸言することを敢へて冒すであらう。なぜなら「桐壺」から「若紫」までの一讀は、自分に或種の信頼と安心とを持つて源氏五十四帖全卷を最後まで讀み通させようとする意慾を强力に與へたからである。そのことはほかならぬ、野上氏の謂ふところの二つの態度の統一を確乎と示しえたことを意味し、飜譯における Paraphrase（古典作品の現代譯への轉換）の完全性への城壁に押し迫つてゐるからである。われわれは文藝における古典性との手の取りかたについては、佛蘭西のラブレエやモンテエニュの世紀をおもひ起す。また英吉利のドライデンやポープのそれをおもひ起す。わけてドライデンが、その晩年にヴァージルやホーマーの飜譯から、やがて自國のチ・ウサアに手をさしのべて行つたそのパラフレーズをおもふのである。

由來、古典主義時代の作家の內部においては、作家の意圖と述作とが平均性を喪失してゐてはならぬのである。作家の精神、作家の性格が、古典文藝の精神を押し倒し犧牲にしてしまつてはなら

ぬのである。古典性との厳正な均衡、古典性との親和に依つて古典主義文藝ははじめてその存在價値を高めてくるのである。この係はり合ひは古典の飜譯においてパラフレーズとなり、そこに苦難の一路がひらけそめるのである。

谷崎氏は「源氏」において、この苦難の一路からパラフレーズのうつくしい完璧性をみせてくれた。氏の獨創は紫式部の存在を破壞せず、氏の存在は單獨に飛躍することなく、自己のきびしい抑制のうちに式部との適應をみいだした。從つて原作者は氏の前に新しくよみがへつてきた。いな、譯者が原作者を新しく招き、呼びよせえたといふべきである。かくして平安朝文藝の一生態を、立派にわれらのものとして讀み取ることにまで果しおほせたのである。

いまここに自分はあまり、そのうつくしい均衡性のうへからのみ物を言ひすぎはしなかつたか。そのやうな――つまり谷崎氏の「蘆刈」のごとき作品のうへにみえるクラシシズムとのこころよい諸調のうへからのみ、現象性に眩まされて語りすぎはしなかつたか。

われわれはもとより熟知してゐる。譯者がこの均衡・調和・融合を、その飜譯のうへで獲得するために、いかに原作品と身を挺して戰ひ拔いてきたかといふことを。そのことは外貌的な面では、このたびの譯文のうへにみえる周到な言語的表現のすぐその裏に押しかくされてゐる昨日までの戰鬪の血汐の匂ひを嗅ぎとつてみればよい。このやうな永い時差を持つた平安朝言語と昭和言語との何くはぬ平和的握手を、決して一朝一夕のものとみることはできぬ。それのみではない。言語的表現の彼方にひそむ谷崎氏の作家的精神が、われらの遠い祖先の十世紀もむかしのそれと四つに組んで、いまははや何ごともないところまで、ぎりぎりな安定感を持つに至るまでの道行は、おそらく氏がこの飜譯の仕事に着手する以前からの問題に屬するであらう。それは今にして「春琴抄」をおもひ「蘆刈」をおもへば足りるであらう。そしてこれらの作品をかき、「陰翳禮讃」を說き、また「源氏」を譯した谷崎氏を、ひとはおそらく、われらの傳統文藝へ全く歸り着いたと考へるであらうか、實はそこに疑問の餘地が殘されてゐる。

いな、さういふ彼の作品のみでなく、現代譯源氏のうちにすら「刺青」をかいた若き日の谷崎を養ひあげた西歐文藝的精神が用心ぶかく潛んでゐることを見逃しえない。西歐近代文藝の波濤をくぐつてきた現代の人の文藝的意識と、袖觸れあふのは、この古典的タイプのうちにもひとつの西方的なものが生きてゐるからである。その西方的なものの價値をここであげつらふといふのは、今の意圖とは別の事である。谷崎氏も、やはり歷史と共に生きた人であつた、といふに過ぎない。

單に飜譯の外皮的な問題――言語方面の事柄はしばらく措くも、かかる古典性の問題、古典と現

代との協約の問題は、おもへばしかく單一には語りえぬのである。」

Ⅱ

古典文學隨感

1

いま私は腸の病氣で難澁してゐる。惡くなり始めてから、もう大分たつのかも知れない。けれどもそれが目立つて、惡くなつてきたのは、今年の正月頃からであつた。あまりくさくさするから、溫泉にでも出かけたらいいかも知れぬ、と思つて奥湯河原に、松の内に出かけて、湯につかつてみたりしたが一向癒らぬ。醫者にかかつたり、指壓療法をすすめられてやつたりしたが、間もなく小康狀態になつたと思つたら、三月にまた惡くなつた。それも一段落したら、こんどは五月の初めからまた惡くなり、醫療でも指壓でも、一進一退して少しもはつきりしない。醫者は「慢性大腸炎」と言つてゐる。半流動物を攝つて、疲れると床のうへに横になつてゐるくらゐだから、祿な仕事もできぬ。

學校に出て講義をしてかへるのが、精一杯である。勿論、ビールが配給されても一滴も飲めぬし、

好きな珈琲も五月から飲まずにゐる。

書齋に床を敷いておいて、いろいろな憂うつな妄想に耽つてゐると、毎日、雨の音がしてゐる。この梅雨は腸にはわるいのださうだ。白金懐爐を腹卷の中に入れて、電車に乘つたりしてゐても、やはりこの頃の雨は、腹を冷やすのだらう。ただ、アルコール成分などとらないのに、他人は、何となくアルコール臭い奴だと怪訝に思ふことだらう。

書齋で横になつて、毎日、雨の音を聽いてゐると全く、心の霽れるときとてはない。ただ庭先の紫陽花の花だけが、雨に濡れてうつくしいだけである。新聞を手に執ると、胃腸の藥の廣告だけ、いやに眼につく。それから、腸の弱さうな友人のことなぞ思ひ出す。勿論、腸で死んだ友人のことは、いろいろ考へ出されてくる。この頃は、芭蕉のことを考へ出す。芭蕉は腸が弱かつたのだ、とひとりできめて考へるのであるが、これもたしかなことはわからない。「花屋日記」の一部分などを、中學時代に教科書で讀んだりしたので、それが頭にこびりついてゐるのだらう。「花屋日記」には、「河魚の患」などといふ言葉を使つてあつたやうだ。そして、それから「奥の細道」には、岩代の國に芭蕉がさしかかつたとき、雷雨のする晩に、持病が起きて苦しんだが、その翌日、非常な勇猛心を起して出かけ「路縱横にふんで伊達の大木戸を越す」と、いふ文句があつたやうだ。そ

この文章は、たいへん悲壯なものであつた。このときの持病といふのが、どうも腸の病氣だと、まったとかく思ひ込んでしまふらしいが、ほんとはさうではないらしい。芭蕉のは「膽石疝」とかいふので、發作的にくるひどい腹痛のあるものらしい。また、醫者で俳人の胡桃太氏に據ると、そのうへ、痔核を持つてゐたらしい。痔核は、内か外か知らないが、そんなものがあれば、一層、つらいことだつたらうと思ふ。それで、私は芭蕉の病氣を穿鑿して、それが果して何であつても、ただとにかく腸だと、頑固にひとりぎめにしてゐるものが、どこかにあつて、この頃、芭蕉のことをよく考へるだけである。さういふ芭蕉がしばしば永い旅をしたといふこと、そして、あのやうに、市民の抒情詩を、ほんとに高度な詩として創りあげるために、詩人としての悲壯な決意のもとに險難を超えて行つたことを。

腸の病氣がきつかけで、芭蕉のことを考へるが、ほんとは腸が悪くなくても、芭蕉といふものは、いつも新らしく自分に對してくれるやうな氣がする。新らしく對してくれるから芭蕉の作品は自分には古典である。それはおそらく、私ひとりでなく、この頃は、芭蕉が特にかへりみられてゐるらしい傾向があるので、いよいよ古典として多くのひとのうちに、新らしく生きてきてゐるのであらう。

2

いつの時代になつても、それが新らしく人間のこころに生きなければ、古典といふ資格を持つとはいへまい。

もうあれから一年以上もたつたかも知れないが、去年、朝日新聞の主催で、上野に「日本文化史展」があつたときに、陳列されたものをみながら、ふと思つたことであつたが、そこには御物をはじめとして、繪畫や工藝美術品やいろいろなものがあつたが、文書典籍のところを觀てゐて、そこには「日本書紀」や、貫之の自筆といはれる「古今集」や「大鏡」や「榮華物語」の古寫本や、定家の「明月記」の自筆、慈圓の「愚管抄」の草稿だのがあつたのを、非常に惹きつけられ乍ら、燒きつくやうに眼を光らかして歩いて行つたが、ふとそのとき反對に、妙にしらじらしたことを考へたことであつた。それは、もしも古典といふものが、こんな風に、陳列棚の中にぢつと竝べられてゐるやうに、どこか空間に古いひとつの物的なものとして在るので、これはかういふもので、あれはああいふもので、とちやんときまつてゐて、それをただ固定した心が受身で、受け取つてゐるだけなら、何といふ過去の時代とは、さむざむとさびしい貧しい、時の流れであらう、そしてその中にぽつりぽつりと殘つてゐる、かうした古典籍とは、何と、佗しいあはれなものだらう、と。

それでもただ有難がつて、かうしたものを古典として拜跪してゐる人間があるかも知れないが、自分にはそんなことはできない。

ひとつの典籍を、古典とするかしないか、といふことは、みな今日の人間の精神がやることなのだ。だから、古典がずつと生きてきたといふのは、どの時代の人間にも、そのときそのときの精神の糧とするだけ、その古典が夥しい人間の心を生かす力を持つてゐたからであつた。さういふものでなくただ紙魚の喰つた古臭い本だといふことだけが、もしも古典だといふなら、毎朝、配達される新聞や、月々店頭に飾られる雜誌でも讀んでゐる方がずつと意味がある筈だ。新聞や雜誌のうちには、やがて古典になりうるものが含まれてゐるかも知れないが、それは何といつても、まだ時や人間の審判を經てゐない。ところが、所謂、古典といふものは、さういふ審判ずみのもので、時代を貫いて生きる潑剌とした力や光を持つてゐる。だから常に新らしい匂ひに滿たされてゐるものである。さういふ性質を持つてゐるからこそ、われわれは古典を讀まねばならない。新聞や雜誌を讀まねば、われわれはもはや今日を生きて行けないといふこともほんとであるが、それだけでは、まだわれわれは、人間として深く生きることはできない。限りない人間の精神を生き通して、そこに

實にうつくしい結晶の堅さを持つてきてゐる古典は、實は、明日への新らしい精神や文化の創造の糧となるからだ。

日本の古典文學――古事記や源氏物語や平家物語や徒然草、そして西鶴や近松や芭蕉の作品。それらには、もう、近代の教養を受けてきて、ゲーテやシルレルや、トルストイやドストイェフスキーのものを超えてきたわれわれに、この頃ひとつのむしろうらがなしい宿命や鄕愁から、再び父祖の精神へと歸つて行きつつある、所謂、一茶の句の言葉ではないが「終の栖」といつた感慨までが湧き出してきてゐるのではあるまいか。

たとへば、近頃の芭蕉への關心――それは多分に若いゼネレーションまで、一種の鄕愁に似たもので、親しく足を向けて行つてゐるのではあるまいか。近代的なヒューマニズムの精神が、割合に弱いかとも思はれる、さうしたわれわれの古典ではあつても、結局はそこに父祖の懊惱や憂愁や宿命を背負つてゐるものとして、そこに歸つて考へなほし、それを明日の現實や文化の再建に生かすのでなければ、ほかに手はないと考へてゐる心情がそくそくと沸いてきてゐるのではあるまいか。

その昔、ドイツの浪曼派のひとたちが、外國のシェークスピアの劇に古典をみいだしたことがあつたやうに、われわれの昔にも、外國のものを古典として、殆んど肉體化してまで掴んでゐたことがあつた。芭蕉が西行だけで滿足しないで、杜甫の詩情をわが新らしき詩情として胸に抱いたことは、ひとのよく知つてゐるごとくである。また、われわれの父祖があの論語や唐詩選を、たとへ自國の古典に冷やかであつたひとでも、それに永遠の新鮮さや光明をみつけ出してゐたことが、隨分と永く續いたことがあつた。トルストイやチエホフを讀んだ世代のこの國の若き教養人たちが、むしろ反撥してさうした古代支那の古典を見向かうともしなかつた、といふことは、一應、意味や理由があつたにせよ、淺墓な食はず嫌ひのこころといはれても仕方がないことであつた。外國の古典でも、それを受け取り掴む、一應の文化的な用意がこつちにできてゐれば、それはやはり、緻密な結晶の堅いうつくしさを以て、いつまでも人間の魂を捉へ、いつまでも新らしい香氣を撒いて人間を深め、創造の精神にまで動かして行く、すばらしい力を示してくれるものなのである。

3

書齋に横になり乍ら眺める、梅雨の降りしきる庭先の紫陽花のひんやりしたみづみづしさは、うつくしいと言つた。晩夏の頃にもなればうら枯れても、また來年の初夏にはきつと花をつけてくる。毎年、觀てゐるが少しも飽きることがなく、いよいようつくしいと思ふ。

古典とは、この紫陽花の花のやうなものであるのか。

飽きることがない。いつも何か新らしい面をみせてくる。これを特に自分といふ個體が好むか好まないか。――さうした多少の違ひはあつても、この花に深く惹かれるひとといふものは、かなりの多數にのぼつて、そこにこの花は生きてきた。好むか好まないか、といふところから、常にひとつの問題さへも提供してきたのだし、これからも提供することであらう。

紫陽花の花がさうであつたやうに、今までも古典は、永い永い人間の歴史のうちを何らかの新らしさを持ち、問題を與へて生きつづけてきた。それは決して今までと、言ひ切ることはできない。

いま古典は、世界の人間の思惟や精神の中で、またまた新らしい問題を提供してゐるのではあるまいか。

ギリシヤやローマの典籍を古典と考へたり、ゲーテ・シラーのものを古典と見做したり、或はシェークスピアだつたりした考へが、動いてゐるらしく思ふ。あれほど嘗ては自國の巨像のやうに誇りかに語つたドイツ人が、その巨像のやうなゲーテの全集の刊行を禁じたとかいふ話も、もう暫く前に聞いたほどである。ナチ・ドイツには、ベンツなどといふゴーチック的ドイツ精神主義者が出てきて、さうした傳統的な古典觀にひとつのプロテストをやつてゐるやうだ。民族主義者のローゼンベルグもさうであらう。文藝學者のリンデンは、古典評價の基準を修正し、文學史の書き換へを主張してゐるらしい。

ドイツは、英米を敵とし、ソ聯とも全能力をあげて戰つてゐる。ドイツにとつては、世界情勢の齎した第一次大戰以上の國難であるに相違ない。

併し、フランスもまた國難である。そして、フランスには非常に新しいものを受容れる感受性やセンスがあり乍ら、一方また非常に傳統を重んずるところがあるやうだ。フランスが自國の傳統的な文化や古典を誇り尊ぶといふ意識は、なかなか根強いものがあるらしい。さうしたフランスが、今のやうな國難に當り、そしてやがての後に、どういふ風にその傳統統文化や古典を考へるか、見直すか、問題を提出するか、といふことは、かなりきびしい切實なものとして彼らをゆさぶるのではなからうか。その突き詰められるところの頭腦や精神の緊張は、おそらくわれわれ外國人の想像以上ではないだらうか。

だが、これは何もヨーロッパのことだけではない。われわれの場合でも、さうした現象はいま目前にはつきり示されてゐる。だが、考へればすぐわかるやうに、われわれは嘗て、外國の古典を古典としたことはあつたけれど、(法華經とか論語とか白樂天とか)その古典は樞軸になるものとして

古典のはなし

は、どこまでも、自國の古典であつた。日本の國家組織や民族統一の事情が古代から一貫してきてゐる。それは、神話との關係を考へてもはつきりしてゐることである。われわれの民族の系譜のうつくしさはそこにある。われわれの國家の單一的な獨自性もそこにある。

だが、われわれの自國の古典に文化精神の樞軸たるものをみつけてきても、その古典はいつでも同じ眼や同じ角度が注がれ規定されてきたのではなかつた。萬葉集は、近世以來、今日までの日を幸福な、そして日々これ新たな意味でとりあげられてきてはゐるが、嘗てのむかしは、薄暗い日影のささぬ唐櫃のうちに、その不遇の吐息をさびしく洩らしてゐたこともあつた。古今集にしても、中世の貴紳には詩文藝のホーリイバイブルであつても、明治時代の正岡子規からは、あのやうに打ちのめされたのであつた。源氏物語は、中世期はややまつたうに觀られ、近世になると褒貶の喧噪の裡に佇み、それからは少し賞讃の拍手の音に惠まれすぎたが、今日では一部からはやや遠ざけられようとしてゐるかにみられる。さうした古典のうちで大きな座席を占めてきたものばかりでなく、久しぶりで白日の光を浴びたやうなものまで出かかつてゐる。たとへば、幕末勤王の志士たちの短歌のごときものである。或は文藝の發展や、そのポイントの置き方の修正のための絢爛なる要求の擡頭である。日本武尊や後鳥羽院を新に見奉らねばならぬとする意向のごときは、それである。

日本の古典などは、何となく思想がない、人間がゐない、といふやうな考へ方で、見向きもしないではすまされなくなつてきたことは確かである。西歐近代の諸作品だけが、尠くとも古典であつて、この國のそれはみなどれもこれも、この梅雨のやうに鬱陶しいときめ込んで、脇見ばかりしてゐたといふことは、論理的にも心理的にも、考へ直さねばならなくなつてきたことも明白である。

梅雨を厭うても、これは日本の梅雨である。われわれの父祖たちの菅笠や袖を濡らしてきた雨である。その雨のことをどうして考へずにゐられようか。

その梅雨空の下にも、紫陽花の花はひらく。不思議とその色は刻々に移り變る。文藝の花のやうでもある。

日本古典との疎隔

もちろん義理などといふものがあつてでなしに、いろいろなわけとか値打ちとかを識つてゐて、そのものにもつと近づき親しみを持たねばならぬと思ふに、それがどうも思ふやうにならぬといふときには、切なさは深いことである。

これは片思ひとはちがふ。片思ひよりもつとややこしいのである。

私はかうした、片思ひよりもつとややこしい心持に身をもてあまして苦しんでゐるひとの話をきかされたことは、一度や二度ではない。

それでは一體、何をそんなに好きにならうといふのか——といふのは、この日本の古典を好きにならうといふのである。

もつと古典に親しまねばならぬと、あれこれの理由から考へるのだが、どうにもかうにも結び合はなくてやりきれぬと、私の前でほんとに困つたやうな、途方に暮れたやうな表情をみせる若いひとがある。

それが始めつから、日本古典などとは全く縁の無い環境に置かれてきたひとなら、さういふことも尤もだと考へられさうだが、驚くことに、(實は何もさう驚かなくてもいいのだらう)少くとも專門學校程度のところで、ちやんと國文學といふものを、三年も四年もやつてきたひとが、こんな吐息を洩らすのである。

學校で國文の講義を聽いてゐるときも、さつぱりおもしろくなくつて、つひうかうかと卒業してしまつたといふ。結局、國文學とか日本古典なぞといふものは、少しも解らないで過ぎてしまつたのだ、と憮然としていふ。仕方がないから自分ひとりで、またやりなほしてみようか、と考へてゐるのだが、それがそれどうも手も足も出ないのだ、とこぼす。

私は聽いてゐて少しく耳も痛いし、また相手には氣弱になつてきて仕方がないから、

それがいいでせう。けれど、もうさうなつたら、またどこかへ行つて國文の講義を聽いたり、うんうんいつて、國文學者のかいた本などひつくり返さないで、もつと自由に、そしてむしろ國文學者でないひとが、日本古典についてかいたやうなものを讀んだ方がいいかも知れんです。

などと、なかば氣の毒になりぢつとしてゐられず、重症のひとにでも懸けさうな言葉をいつたりす

る。

かういふ溜息まじりの話をするひといふのは、たいてい大正生まれのひとである。明治生まれのひとにもあらうが、併し、大正の終りの頃に生まれたりしたひと――もつと先の昭和生まれの人が、古典の問題にぶつかると、いまの世間の風潮からみると、たとへ冗談でもあまり表立つては、さういふことは口に出さなくなるのかも知れん。今、そんな氣配が私たちにみえないこともない。

そこで大正生まれのひとが、かういふことを言つてこぼすところから考へてみると、どうも物のつながりといふものは、相當、尾を曳くものだとつくづく考へることである。

明治も終り頃から大正にかけては、概論すれば、日本の古典は押入れの中に這入つてゐたかたちであつた。この時代の空氣をいちばん強く吸つてゐた智識人たちは、どだい、生活のやり方でもセンスでも、まだまだ近代的革新の餘波を受けてゐて、古典はみるが、それは西歐の古典だつた。西歐の古典からの方が、今日明日、胸底をつつく自己の問題を考へたり解いたりする鍵が與へられると心底から考へ、例の押入れの中のものなぞ忘れてゐたのである。

さういふ名殘りがづうとまだ續いてゐて、今でも國文學を曲りなりにも專攻しておいて、こんなに靑息吐息をつくひとがあつたりするのだと思ふ。

それから、もうひとつ。いまの國文學といふものはもちろん、近世國學の傳統のうへに立つてゐる。國學には、やはり近世の學問だけに、隨分と科學的な合理的な客觀的な態度がみられたが、一面、何といふか、非常に宗教的な信仰的な、そして絕對的なところもあつた。宣長の學問などはたしかにさうであつた。

それが明治になると、いろいろな學問のやり方を大體、ドイツあたりから輸入してきたが、國文學もやはりその例に洩れなかつた。芳賀矢一博士や上田萬年博士は、ドイツへ行かれて、ドイツの所謂、フィロロギー（文獻學）の方法を學んで歸朝された。國學とドイッチェフィロロギーとは全然違つたものみたいに考へるひともあるけれども、必ずしもさうではないやうで、實は國學の方法の中には、ドイッチェフィロロギーと非常に似たものがあると思ふのだ。主觀を排除して與へられた材料を客觀的にみるといふ態度である。訓詁學などが、文獻學と手を握るのも、さういふ文獻學の性格ゆゑである。芳賀・上田兩博士の舶載の新しい方法の香氣を嗅いでも、それ以前から背負つてきたしきたりにも足をとられてゐて、一種妙な客觀主義、科學主義を大事にして、しかも永いこと古典の世界にばかり住み込みをしてきたので、いつのまにか硬化し固定化した國文學ができてしまつた。

明治以後の別の場所では、文學といふものを、切實に考へて歩いてきたのに、國文學はその日その日の文學の動きからは、緣が薄くなり、敎壇や專門雜誌のうへでは、該博な文獻學的訓詁的知識がひろげられるが、ひとが當面してゐるわれわれの生活の眼前の問題を扱つてゐるやうな今日の文學のことは、全く知らぬが佛になつてゐるといふことになつた。

從つてそのひろげられるものは、決して文學の問題ではなく、またひとつの作品が讀まれても、それは作品としてではなく、言語學や歷史や地誌や風俗史などの材料として扱はれたりする。

そもそも、どんなに安定した顏附きをして國文學をやつてゐる者でも、はじめからそんな顏附きをしてゐたのではない。始めは、やはり若い魂を顫はして、自分を直接に生かすものを求めて、その手がかりとして國文學を取りあげ、それに取りつくのである。ところが、さうしたそもそも最初の、若い魂が思ひ詰めるやうにしてやつてきたものと、國文學の世界とはかなりの喰ひ違ひがある。その喰ひ違ひをいつまでも解決できず、或は妥協できない魂は、講筵に侍し乍ら睡魔におそはれたり、欠伸をしつづけたりしなければならない。

青い花は、そこには咲いてはゐなかつたのだ。

そして數年の間、眠つたり欠伸をしたりして、あつたら青春を勞費してしまふ、これらの若い魂を決して、肯定できるものではない。少くともそれでは自分に誠實さを缺いてゐるといはなければならないが、併し、どうも一方、ここいらに國文學の反省材料も在るといへさうである。

ただ幸ひに、思ひ惱んだ擧句、どこかに引つかかりをみつけて、國文學の中に自分の生き場所をみつけて、若い學徒としての誇りを持ち始めたものが、睡魔や欠伸に祟られないで、自分で打ち込んでかかるやうになれるのだが、――實はかういつた實情の中に、なかなか深い、われわれの國文學の微妙な課題がひそんでゐて、これから先の國文學の生ひ立ちにも、或る無限の示唆をふくんでゐるといへよう。

そこで國文學の講筵といふのは、さし當り訓詁的な傾向が風靡するのは、とにかく國學の道統のうへに立つた近代以後の國文學のありさまなのだが、それを一概に頭からつまらぬといつて、惱まうとしない若い者も少し考へて貰ひたいものである。實は、專門學校あたりで、うんとさういふ勉强をしておかなくては、常に言葉の障壁を持つてゐる古典文學など手も足も出ないのだ。

ところが、われわれからみると、外國語の先生といふものも大抵、この國文學者と同じやうなことを敎室でやつてゐるのだが、その方はあまり學生は文句を言はない。

これは一寸、奇妙なことである。

學生は外國語といふものを、始めから言葉そのものを不可知のものとして、ひれふした心もちでやり始めるのだし、まだなかなか、言葉で表現されたものの內容に立ち入る餘力を持てないでゐるらしい。いくら古典でも、何しろ自國の言葉であることは確かなのだから、少しは勘がはたらいて、さういちいち手を執つて貰はなくとも——といふなまじつかの我意が出てくるし、また一方では、例の明治大正以來の拜外の殘夢がそこいらに立ちけぶつてくるのであらう。さう考へると、同じことをやつても國語の先生といふものは分がわるいことになる。

そこで國學の傳統のうへに立つて、文獻學をも取り入れたが、自分からはただその亞流に棹して、學生を眠らせてばかしゐたやうなものでも、近頃ではヨーロッパの文藝學に示唆を受けて、いつか提唱されてきた「日本文藝學」などといふものが起つたので、少しはこの新しい學問にも注目したらうと思ふ。

日本文藝學は、決してドイツの文藝學の糟をねぶつてゐたつてはじまらないので、これから、いよいよ立派なものにしあげなくてはならないのだが、皮肉でなしに、そんな學問があるんですか、などといふことを言ふひとが存外あるらしいのは、少しく賴りない次第だ。せめて、かうした學問が健康に成長でもすれば、案外、そんなところから、睡魔におそはれる青年男女、卒業してから、もういちどやり直さうかなどと吐息をつくひとは減るのかも知れない。

それにしても文藝學の成長のためには、文獻學や書史學や、それに次いでは訓詁學などかしつかりしなければならないのだが、ただ或る個人が古書珍籍を漁つて、どんなにコッコッやつても、なかなか埒があかないので、さういふ方面のことは、むしろその方面の專門家たちを動員した大がかりな機關を設けて、組織的にやつた方が、おそらく能率があがり、成果もえられるだらう。だからこんど、文學報國會の國文學部で計畫した、國民古典全書などは、いいものができれば、非常に意味があり、そしてかうした仕事に依つて、古典が整理統一され、それをできるだけ廣い知識大衆へ與へ、彼らの生きた眼でみたところを、どんどん發言させることだ。さうすれば、古典はほんとに國民のものとなるのである。

まぶしいほどに日ざしがさせば、亡靈は引込むほか仕方ないのである。

古典と音樂

專門といふことをかなり動きのとれないものと考へてゐる、この國のひとたち――わけて、少しでも學問などを嚙つたものほど氣の毒なくらゐ量見が狹い。

だから自分が假に「メンデルの法則」を云々したり「量子論」を論じたりしたら、ひとは嗤ひ出したり、目を瞠つたりするのであらう。實は自分が音樂のことを言ひ出したりするのは、つまりはそれと同じではないかと考へるのだが、どうせこの暑い盛りに僕がむづかしいことを言つたとて、誰も眞面目に讀むひとなどあらう筈もないので、たまにはこんなたはごとを言つても、それほどひとの迷惑にもならずにすむだらうと思ふのである。

一體、音樂の方で、古典といふのはどこいらの作品をいふのだらう。バッハやヘンデルなどをいふのかもしれないが、どうもこれらのひとでも、社會史や文化史の方からいふとずゐぶんと近代的である。いや近代である。それではベートーヴェンあたりなら、たしかに近代音樂だといへさうだが、私がいま自分の部屋でベートーヴェンを聽いてゐたら古いものを聽いてゐることだと、誰でもすぐすなほに考へることであらう。それではシューベルトやショパン、いや、もつと先のグノーだのチャイコフスキーこそ近代音樂だといふのだらうか。私は實のところ、そんな音樂人たちの約束だの常識だのといふものは、てんで意に介してゐない。私は音樂史家でもないし、またさういふことを喧しくいふ頭の惡い音樂史家の下手な理窟など聽くひまがあつたら、庭の草でもむしつてゐるだらう。これは僕らが文學で考へてゐる古典觀で押してさしつかへないので、或る民族や或るひとや、或る意識や眼に於ては、ベートーヴェンやワグナーが古典であり、またショパンが古典だつたりするのである。その中から自分や自分の生きる時代に意味深いものを掴まうと、らんらんと瞳が輝やき胸がたぎつてくれれば、その掴まうとされる對象は古典となるのである。

何もバッハやヘンデルだけが、どうでも古典でなければならぬといふことはない。ただ普遍的なものとしてバッハやヘンデルが客觀的に古典としてそこに在るのではない。

もちろん、ショパンは演奏會で彈くまへには一室に閉ぢこもつて自作でないバッハを彈奏したといふ場合、バッハの前奏曲やフーゲを彈いてみることに依つて、指の絶對的な獨立性やタッチの區別とか色どりといつたものをそんな際に於てまでも獲得しておかねばならなかつたといふことは、

彼に於てはやはりバッハは古典であつたのだ。

いまふとしたことから、ショパンのことなど言ひ出したが、この頃は、ベートーヴェンやシューベルトなどの傳記書などはよく出版されるが、ショパンなどはあまり省みられないことだと思つてゐたら、最近しきりにショパン研究書が出始めた。

だが何としてもあの、貴族的でブリリアントでダンディである彼などは、かうした時代とはふさはしくないのだらう。ショパンだつてもしこの時代に生きてゐたら、あの痩せて蒼白い病的な憂愁を湛えた顏は、ますます暗い翳が深くなつたらうと思ふ。ああいふ男がいま生きてゐないでまあ彼のためにもよかつたといふものだ。彼といふ存在の中で、この時代にも係はりがあるものといふのは、彼の藝術に對する深い誠實さのみである。

ショパンの顏のことをいつたので、思ひ出したが、彼の肖像畫といふものは美術の方にずゐぶんあるらしい。そのことは有名なハネカーのかいたショパンの傳記にもかいてある。勿論、僕はそれらの畫を寫眞では、一通りみてゐる。

僕が昔から好きな、ドラクロアの描いたものだけは、二三種の寫眞版、原色版でなじんでゐる。少し前のこと、兒島喜久雄さんの「美術批評と美術問題」の中に、このドラクロアのショパンの肖像についての記述があつて、それを讀んでゐると、いろいろ教へられてうれしくなつた。その終りに「十九世紀の肖像畫中此の畫の右に出づるものが他にあらうか」とかいてあつた。

それで更めてまた眺めたくなつて、僕が筐底に突込んでおいたその寫眞版を取り出して書齋の壁に懸けたのは、この初夏の頃だつた。あいにくと、これは粗末な國產の刷りなので、どうもこの襟飾の、「ブルー・ド・ブリュッス」などが殆んどわからぬのは、まことに殘念でしようがない。

私は夜更にひとり起きてゐて、仕事に疲れはてたときなど煙草を吸ひながら、この壁のショパンのデリカーな表情をみつめたりする。

ときどき畫を離れて、やはり考へはいまの時代のことに及ぶ。私はショパンの生き方に同情したり、またそれを批判したりする。彼の藝術に對してもさうである。ショパンの全部をすなほに受け入れたとしても、私は彼と同じ生き方をしようとは考へない。だが彼の藝術のどこかに、私にとつて古典的なものがないことはない。

またこの間まで朝起きると私は、シューベルトのデア・ワンドレル（さすらひびと）をゲルハルト・ヒュシュがうたつたものを聽いては、學校へ出かけたりした。私が講義をするうへにシューベルトやヒュシュの藝術は或る示唆をあたへてくれたからであつた。

そしてそこにうたはれるシュミットの詩の言葉もよく考へられた。何といふ悲痛な詩であるか。私は自然に對する西歐文人の考へ方や感じ方と、われわれの古典詩人のそれとの違ひをよく考へたことであつた。芭蕉の「野ざらし紀行」は悲痛であるといつても、これほど絶望的ではない。案外に、武骨な私の思考は、ジューベルトを聽いてゐても、そんなところから私の仕事の問題をたぐり出してしまふのである。

浪曲小感

われわれは浪花節に就いてはさほど興味を持つてゐるものではないが、さすが名人といはれる連中のものをぢつと聽いてゐると、決してつまらぬといふ感じは起きない。

そして聞くところによると、この浪花節の大衆的人氣といふものは絶大なものださうである。ラジオ聽取者の最も熱望するものは、浪花節が最高點だといふことも昔、聞いたことがある。

われわれが子供の時から、街頭を歩いてゆく魚屋・八百屋の小僧が唸つてゆくところのものは、この浪花節が多かつたし、錢湯などで、くりからもんもんの兄い達が湯槽に寄りかかつて唸るものは、大抵、浪花節が多かつたと思つてゐる。さういふ職人や商人――つまり斯樣な民衆の間に肉體化された娯樂として生きてゐるものが、この浪花節だとすれば、大衆の聽覺が一點に集められるラジオといふものへの「耳」を、數字のうへで現した場合に、最高點を占めるものが浪花節だといふことは別に不思議ではない筈である。

ところで一方、所謂、教養人とか文化人とかいはれる知識層の人々の間には、この浪花節はおよそ人氣が無いのである。浪花節ときけば忽ちヒンシュクしてしまふのが彼等である。彼らは明治大正時代の急速度に移植された西歐文化をその榮養素として成長したので、ベートーヴェンやショパンを高級な藝術として傾聽するが――そして傾聽するがゆゑに、つまり、ベートーヴェンやショパンから彼らの耳が這入つて行つたために、到底、浪花節などは聽くに堪へないとするのである。聽いて分るとか分らないとかいふ前に、面白いとか面白くないとかいふ前に、もはや全然、耳に入れないのである。浪花節は卑俗である下品である――といふ觀念が、強く彼らの感情のうへに君臨してゐるのである。彼らは、清元とか歌澤とかいふものに對しては、一應それを認め、あの「保名」とか、或は「秋の夜」などのこまかい旋律を高く評價しさへもするが、こと浪花節に及んでは、現象的には全く赤の他人である。十十といふのが尠くとも、若い知識階級の對浪花節の實情であるらしい。

さういふ知識人たちの嫌厭感が、この浪花節のうへに烈しく注がれてゐるにしても、自分は、なぜこの音樂がこれほどまでに民衆のなかに喰ひ込んでゐるかといふことに、非常な關心を持たざるをえない。なぜ熊さん八つあんが、かくも虎造や雲月に熱狂するか、といふことに多大の興味を感ぜざるをえない。

もともと浪花節が、さういふ人々の間に力强くアッピールし始めたのは、明治の初年頃からであつたらしい。浪花節は元來、淨瑠璃の一種で、「浮かれ節」とか、「ちょんがれ」とか呼ばれて、その節も詞章ももともと低俗であつたらしいが、その源流はかなり古い――といつても化政時代ごろであるとかいふ――もので、われわれがいま浪花節といつてゐるやうな形式を完成しえたのは、明治の浪花亭駒吉とか桃中軒雲右衛門とか吉田奈良丸などの時代であるだらう。

われわれは浪花節が音樂であるとしても、とにかく單調であるといふ點では、薩摩琵琶・筑前琵琶などと同樣であるやうに思ふが、とにかく虛心に聽けば、あの歌舞伎の所謂「厄拂ひ」といはれる箇所に這入る三味線の音――それを思はせるやうな冴えた音、そして言葉のところどころに出てくる一種の輕いくすぐり、そしてあの節まはしにみられる獨特な發聲法、實にこの發聲法の卑近さに、前に言つた教養人たちの蔑視感は集注されるのであらうが、一方、熊さん八つあんには、この發聲法の中にこそ何ともいへぬ魅力がこもつてゐるのであらう。

正直なところ、浪曲の發聲法が高級であるなどとはわれわれも考へられないのだが、そこには野趣のある素樸な感覺が漂つてゐることは感じられる。上品な高雅な感覺にもおもしろみがあるたら

うが、野趣に富んだ卑近な感覺でもおもしろくないといふことはない。浪曲のさういふ感覺の點では、清元や歌澤などといふものの比ではない。又、全く音樂的な節まはしの間に、全く日常的な會話が入つて來る對照の斬新さ。この節と言葉とのなひまぜは、日本音樂の本流であるやうであり、清元にも義大夫にもみられるけれども、その言葉はある程度音樂化されてゐて、浪曲程、日常語そのままに近くない。從つてその對照もくつきりとしてゐない。西洋のオペラなどで、レシタチーヴォといふ調を使ふが、それが近代になつて次第に尖鋭化して、ほとんど日常談話風に歌ふ所まで來てゐるといふが、從來の或る意味では不自然なオペラの中の會話をきいた耳に、音樂に伴奏された只の會話といふものがどんなに魅力的であるか、浪曲のゆき方や歌舞伎の囃をともなつた會話などから察知することが出來るやうに思ふのである。(第二次大戰後のオペラが、どのやうになつてゐるか自分はしらない。しかし自分の耳には、依然として音樂にともなはれた只の言葉といふものは魅力的である。)

語り物としての浪曲の題材は、講談などから大分、攝り入れてきたらしいが、所謂、武士的精神――といつても、それは主として町人的意識から捉へられたものであつて、本來の武士的精神とは稍々趣きを異にしてゐるところが見受けられる。

併し、とにかく廣義の武士的精神とか、町奴・やくざ達の任俠的精神などが、主要なものとなつてをり、さういふ精神や意識を、言ひ換へれば悲壯美を、通俗に平易に表現する方法としては適確なものを見出してゐる。

明治維新以後でも現在でも、われわれの社會には、近世封建的な地盤といふものはまだ根強いのであるから、知識層のうへを一應撫でてきた西洋的意識とは殆んど無緣に通つてきた、文化的に低い民衆の思想なり、感情なりは、さういふ日本の常識化した傳統的精神と堅く結びついて離れないのであらう。われわれの國民性のひとつといはれる「判官贔負」の精神などは、この浪花節のうちにはつきり見出され、さういふ精神だけを比較的、單純素樸に保持してゐるものにとつてはピッタリと、あの言葉でも節まはしでも語られる事柄でも享受できるのである。ところが反面でかういふ精神は、あながち教養のない人々ばかりでなく何等かのかたちで、われわれには無意識のうちに全く肉體化されて身についてゐることを知つてゐる。即ちそれは、浪曲を蔑視し、モツアルトやシューベルトの作品を敬慕してゐる知識人のうちにも根強く生きてゐるのである。ただ彼らが意識して浪曲に對してのみ頭から反撥してゐるのである。

だから浪曲のうちに盛られてゐる觀念形態や感情は、戰野を馳驅し、ジャングルを踏み分けてゐ

る皇軍の一兵卒の血肉のうちにも深く生きて動いてゐるのである。支那や英米の兵隊も強いであらう。併し日本の兵隊が強いといはれること、特に精神的な方面の強さは、彼ら兵隊の持つてゐるそれとは性質が違つた強さなのではないかと思ふ。彼らとわれわれとは民族や氣候風土を異にし、生活を異にしてゐる。思考形態を異にしてゐる。皇軍將士の完成された秩序のうへに立つた戰鬪精神と、浪曲のうちにある精神とには或る種のつながりが本質的にあるといふことを言つても、決して荒唐無稽とはいはれぬと思ふ。とにかく何等かのかたちで國民的感情が、この浪曲のうちに直截に生きつづけてゐると思ふ。

さういふ感情も意識も、一應、浪曲としての完成をみた明治時代以後でもその表現形態のうへでは、われわれの氣づかぬ間に多少とも變化しつつあると思ふが、われわれ浪曲にとつては門外漢である者にさへ、近頃はこの節まはしのうちになかなかこまかさが出てきたことも漠然と感じられる。さういふこまかい點になるとわれわれにはよくは分らないが、何でも先年亡くなつた落語家の三升家小勝が、東寶の名人會で、虎造の四十五分間唸るのを樂屋で聽いてゐて腹を立て、樂屋に戻つてきた虎造に喰つてかかつたとかいふことであるが、その虎造の唸り聲を、「あの聲は、淺草寺の緣の下から這ひ出して『お手もとは御面倒さまながら』と人の袖に縋る人物の喉からでなけりや出ないものだ」と言つてゐる。これはおそらく、明治の雲右衛門の聲などを親しく聽いて、そこに浪曲の本道があると信じてゐるものの耳が、近ごろの纖細な發聲法や節まはしにあきたらぬと感じたところの反擊であらう。

併し、かういふ風に浪曲といふ音樂は、單に節まはしだけでなく、いろいろな點で次第に變化してゆくことであらう。現に作曲家としてはとにかく大家であるといはれる山田耕筰氏であつたか、この浪曲の旋律を主題にして立派なシンフォニイを作り、立派な國民的音樂を打ち建てようといふことをいつか言つてゐた。これはヨーロッパのドゥヴォルシャックとかグリークとかいふやうな巨匠が、みな自國の民謠をテーマとして作曲してゐる筆法に倣ふものであらうが、假に耕筰氏が浪花節の旋律をテーマとして堂々たる國民音樂を作りあげても、熊さん八つあんがそれを直ちに理解するかどうかはまことに疑はしいが、尠くともそこに眼をつけたことは面白いことであるし、山田耕筰氏の作曲家としての「眼」（むしろ「耳」といつたらいいのか。）の廣さ鋭さといふものは、洋樂攝取一點張りの時代に育つた人であつても、決してバカにできないので、今尙、洋樂の領域にのみ固定し、音樂通を以て任じるそこらの群小インテリの及びもつかぬところであらう。つまり浪曲は、ショパンが農民のクラコヴィアックを素材としてショパンのクラコヴィアックを作りあげたや

うに、すぐれた素材といへるのではあるまいか。

これを要するに、われわれは、日本の民衆の傳統的文化の問題として、決して浪花節を頭から看過してしまふことはできない。

著者紹介

昭和三年東京帝國大學國文科卒業。
長野縣女子專門學校、國士館專門學校教授。
現在、日本女子大學校教授、大東文化學院講師。
「女流日記」「俳句文藝遠近」「日本文藝史論」等の著あり。

昭和十八年十二月廿五日印刷
昭和十八年十二月廿八日發行

出版會承認イ300201號
建設社刊行書　第四四八番

(五、〇〇〇部印刷)
賣價貳圓五拾貳錢
(※)定價貳圓四拾錢
行爲稅相當額拾貳錢

著作者　佐山濟

發行者　株式會社　建設社代表者
坂上眞一郎
東京都牛込區揚場町八番地

印刷者　成瀨義治
東京都本郷區湯島二丁目一六

東京都牛込區揚場町八番地
發行所　株式會社　建設社
文協會員一〇九五一八番
振替東京八四五四三番

配給元
日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

984
54

終